

「ええっと、今度のラジオ収録の台本は……と。あ、お便りこれか」

今月収録のラジオ台本が届き、
その内容をチェックしている姉貴。

そして、その横に置物となつている弟の俺。

最近はゲームやラジオの台本問わず、
内容確認の際は部屋に呼び出されている。

「…………ん?

ラジオネーム『処女はつまんないと言われた』さん?
ひつどいラジオネーム……」

「あ、でも女の子からの質問だ」

「んーと……ふんふん、ふんふんふん……
彼氏にコンドームをつけてあげたいのですが、
上手くつけられません。経験豊富なほむほむに、
ぜひコツを教えてほしいです……か」

「…………まつたくもお、
次から次へと難しい質問送つてくるんだから、
うちのリストナーは……」

「その度に実験台にされてる、わたしの弟の気持ちも
考えてもらいたいよね? ほんと……」

個人的には、もっと際どい質問を送つてくれても、
問題ないわけだけど。

俺という実験体を手に入れてからと、いうものの、
姉貴はラジオの台本チェックをするのも楽しそうだった。
昔はすごく憂鬱そだつたし、
必死にネットで検索して情報を集めてたから、
その頃と比べたら、見守る側も安心できる。

「というわけで、今日はコンドームのつけ方をお勉強します。
……勉強させてもらつても……いい、よね?」

それには笑顔で頷き返す。

姉貴と性的なお勉強をするのは嫌じやないし、
退屈だつた自分の日常を、豊かにしてもらつてる気がする。

今は、毎日が楽しくて仕方ない。

「……そういえば、結局、ゴムつけたのって、
2回目のエッチの時だけだったよね。
しかもいざつけてしてみたら、二人とも頭の中ハテナになっちゃって、
すぐ外しちゃつたし」

「やっぱり、最初に生でしちゃうと……ね。
ゴムつけたおちんちんじや、お湯で温めたデイルドを
使つてると同じだもん」

わかつていたことだけど、
初体験の一度きりで関係が終わるわけもなく。

二度目はゴムありでしてみたけど、
俺のは挿れてすぐ萎え始めるし、
姉貴も『え、何これ?』みたいな顔をしてて散々だった。

今は、姉貴が低用量のピルを服用し始めて、
中出しし放題になつたから、
最初に使つたコンドームは処分してしまつていた。

ピルの副作用が心配だつたけど、
服用する量が少ないので大丈夫と言つていた。

おまけに生理も軽くなつたとかで、いいこと尽くめらしい。

とはいえ、毎日決まつた時間（姉貴の場合は24時）に
忘れず薬を飲まなきやいけないのは大変そうだけど。

「あ、そうだ。ゴムゴム……適当に通販で頼んでみたんだけど
大丈夫だよね? 一応ネットで調べて、
一番薄いのにしてみたんだけど……」

最初に使つたのは安価な上に結構厚めだったから、
今回は新しく通販したらしい。

……でも、練習で使うの勿体なくないか?

姉貴からすれば、
『雰囲気が大事!』ということなんだろうけど。

「三枚しか入つてなくて860円つて、結構高くない?
お姉ちゃんたちだつたら、一日でなくなつちやうよね。
それが毎日だから……30で掛けて、一ヶ月で26000円ぐらい?
世の中のカツプルつてそんなにセックスにお金かけるの……?」

その上、ホテル代なんかも入れたら、
大変なことになりそうな気がする。

恋人ができるとお金がかかるつていうのは、
本当なんだなと実感。

そして、ホテル代はおろかコンドーム代もかかってない俺たちは、
相当恵まれているような気がする。
比較対象にはならないのかもしれない。

「……ええっと、これどーからでも切れるのかな?」

姉貴はコンドームをひとつだけバラにして、
切り口を探し始める。

女の子がコンドームを取り出す姿つて、
妙にエロいものがある。

「んしょ……あ、切れた切れた。で、どつちが表だっけ?
「う……かぶせる? あれ、こつちかな?」

「……ああ、こつちだつた。
まずは「こ」の空気を抜い、て……もお、触つてもないのに興奮しそぎ。
先っぽにかぶせるよ?」

「……んで、「こ」から根元に向かつて……
しゅるしゅるしゅる……平気? 痛くない?」

「うん、大丈夫」

大きめのサイズを買ってくられたこともあって、
ほどよい締めつけ感。

ゴムをつけるのにサオを握られてると、
それだけでも気持ちいい。

「女の子がつける場合つて、力加減わからないから、
それがすく不安。かなり力を入れないと、
根元まで伸びていかないし……」

「女人が考えてるより、乱暴に扱つても大丈夫だよ。意外とね」

その言葉が参考になつたのか、姉貴は強めに俺のを握つて、
コンドームを根元まで伸ばしていく。

「……よつと。おーできたできた。お姉ちゃん、ゴムつけるの
上手くない?」

「それには……おちんちんの扱い方も上手になつたでしょ?」

なんかもう、ペットの犬や猫を扱うような手つきで、かわいがり過ぎな気もする。

姉貴曰く、『おちんちん、ほんとかわいい♪』らしいが、おかげでまともな社会復帰から遠ざかっている。

「ふふつ……あ、これ一度外してもいい？ ちょっとと試してみたいことがあるの」

コンドームの先っぽをぎゅうっと引っ張つて、ペチンという音と共に、ゴムが外される。

「もうたいないけど、新しいのを開けて……」

「いくよ？ 先っぽにかぶせてから……ん……はむ、ん……ちゅ……んちゅ……ちゅるる……すすす……んふ、ん……んんつ……ちゅううつ……ぽつ……ぽつ……」

何をするのかと思ったら、亀頭の先に被せたコンドームを、器用に手と唇で押し下げていって。

無駄に舌を使つてくるし、半分はフェラみたいなものだつたから、あつという間に、俺のもそそり立つてしまつた。

「えへへ、できた！ お口でつけるの成功～！ どうどう～、手でつけるより興奮した？～？～？」

言わなくともわかることを訊いてくる。

色々なことに好奇心旺盛なのは、いつものことだ。

日に日に、姉貴がエロくなつていつて困る。

「お姉ちゃん的には、ゴムをつけるコツはアレだね。つけてる間も萎えないように刺激してあげる」と

「……特にうちの弟くんは、ゴムつけてると、やる気なくしちやつたみたいに萎んでいつちやうか～」

姉貴の言う通り、カラダは正直なもので。

ゴムをつけてセッククスした時のマイナスイメージが強すぎて、条件反射的に、萎えていつてしまう。

だからさつきも、絶えず俺のを刺激してくれながらのコンドーム装着だった。

「よし、このお便りの回答は、そんな感じかな。
でも、このラジオネーム可哀想じやない?
『処女はつまんないと言われた』さんって……」

「……実際に処女の姉を相手してみてどうだった?
やつぱり、つまらなかつた……かな?」

「そんな」とな「よ」

逆に、童貞を相手してみてどうだったかと訊いてみたい。

そもそも、つまらなかつたら、
二度目三度目とカラダを重ねてないだろうし。

「今、選ぶとしたひどつち?」

「バージンで色々とぎ」「ちなかつたお姉ちゃんと……」

「弟といつぱいエッチして、
おちんちんの扱いが上手になつたお姉ちゃん……」

「う……」

声優の本領発揮とばかりに、左右の耳へ囁かれる。

実際、エッチの時も、
姉貴の声で射精まで追いこまれることが多い。

人気声優の紅衣ほむらとセックスしてるんだと思うと、
また別の興奮があつた。

「ふふつ……自分でも、こんなエッチな子になるなんて、
思わなかつたなあ……」

「……」のおちんちんのせいで、
エッチな女の子にされたんだよ? 自覚してる?..

真面目な女の子は、たがが外れるとすごい……
なんて話を聴いたことがあるけど、
それを信じたくもなる。

最近の姉貴は、仕事のためだけとは思えないエロエロつぶりだ。

「ん……ゴム外すね。今日のお勉強はおしまい」

「……」のまま朝まで……いつぱいエッチしたいと「ろだけば……」

「たまにはくつついてイチャイチャするのもいいよね。
添い寝添い寝つ。ぎゅーつてして、ぎゅーつてつ」

急に抱きつかれて、そのままふたりでベッドへ横になる。

不思議なもので、何度も肌を重ねていると、寝た時のお互いのポジションみたいなのができて、添い寝の体勢も、自然とかつしり収まるようになっていた。

イケメンムードじやないけど、無意識のうちに、髪を撫でてしまう。

童貞を卒業してから、なんとなく異性に対して、余裕が出てきたような気がする。

「……エッチしたあととかもね、こうやつてくつついで、頭を撫でてもらうの好きなの……安心して、すぐ眠くなっちゃうけど……」

実は俺も同じで、姉貴の体温と心地良い声が、いつも安眠に誘ってくれる。

エッチのあと、気がついたら二人で朝まで爆睡……なんてことが、今までにも何度かあった。

「……」

「……あのね、怒らないで聴いてほしいんだけど……ずっと、謝ろうと思つてたんだ……」

一瞬、悪い話かと心配になる。

もうこの関係は終わりにするとか、好きな人ができたとか……

最近の俺は、そんなことばかりに怯えてる。

そうしたこちらの不安をよそに、姉貴は、恥ずかしそうに顔をうずめながら、話を続けた。

「毎日毎日、恋人でもないのに……エッチな」と付き合わせちゃつて……」

「最初の頃は、台本でわからないこととか、書いてある」とを実際にやってみたくて色々お願ひしてたけど……最近はね、仕事であつたストレスを忘れるためにおちんちん触つたりとか……しゃつて……」

「この仕事、大好きなんだけど……収録も大変なんだよね。台本が誤字だらけだつたり、収録が始まつてると、全部の台本が届かないこともあつたり……」

「収録が始まつたら始まつたで、最初に演技して、メーカーの人がリテイクを出してくるんだけど……録り直してみたら、やっぱり最初の方がよかつたとか、今の演技で始めから録り直してもいいですかとか……」

姉貴がこんな風に、眞面目に仕事の愚痴を言うのは珍しい。
でも、不満を溜めこみやすいタイプだと思うから、こういう時に話してくれた方が、こちらも安心する。

「……もちろん、仕事だから笑顔で『大丈夫です!』って答えるよ? でも、そういう細かいストレスが、どんどん溜まつていっちゃって……」

「気がついたら、愛想笑いばかり上手くなつてる。
自分で、いつ本気で笑つてるのかわからなくなるぐら……」

姉貴らしいな、とも思う。

おそらくこちらに意見を求めているわけじゃないし、ただ話を聞いてもらいたいだけなんだろう。

それはいいんだけど……

鼻先にかかる髪の匂いが、眠剤ばかりに眠気を誘つてきていて。

甘えた声を出されると、なおさら意識が遠ざかりそうになつた。

「……でも、こうやつてお家でくつついたり、甘えたりしてると、心がす“い楽になるの」

「お姉ちゃん、姉弟で話してるとだけ、素の自分でいられてる気がするんだ……」

嬉しいことを言つてくれている。

言葉をかけたいのに、もう……眠気の限界が……

「だから……もしカノジョができるやつたら、こういう生活は終わりにするけど……」

「それまでは、お姉ちゃんの……彼氏っぽい弟?……みたいな感じで、いてくれる? な、なんか告白してるみたいだけど?」

「……あれ、寝ちゃつてる?
……静かに聴いてくれてるなあと思つたら……もう……」

「でも、お姉ちゃんと同じように……
安心してくれてるってことなのかな」

「そつだと……いいな……」

……この日は、姉貴に告白をして付き合い始める夢を見た。
できぬことなら、そのままずっと眠り続けていたかつた。

誰もいない部屋で、パソコンの電源を入れる。

今日は『紅衣ほむらのとつても性的なラジオ』が配信される日。

なんやかんやで、毎月楽しみにしている自分がいる。
さすがに姉貴がいる前では聴けないけど、
今日は仕事で夜まで帰つてこないらしい。

「はい、じゃあ次の便り。
ラジオネーム『お姉ちゃん大好き』さんから」

「ほむらさん、ほむらじわー」ほむらじわー。
『僕にはひとつ上の姉がいるのですが、いつも仕事で
がんばつていて、それを応援しているうちに、
ひとりの女性として好きになつてしまいました。
でも、それを打ち明けて今の姉弟の関係を壊して
しまうのが怖いです。どうしたらいいでしようか?
アドバイスよろしくお願ひします』

「……あー、わたしにも弟がいるんですよ。ひとつ下の。
それがもうかわいくてかわいくてですね、
完全にブラコンなんですけど、ううんそつか
ひとりの女性として好きに……うううん……
ほむら的には、打ち明けてしまつていいと
思うんですけどねー」

「だつて、好きになつちやつたら……
誰にも止められなくないです?
周りがどうこう言つたつて、自分が納得しなきや……ね?
たとえ姉弟でも、あきらめるのとか無理でしょ」

「なので、ほむらお姉ちゃんとしては、勇気を出して、
告白してみるのがいいと思います。
その結果がどうあれ、姉弟の関係が壊れることなんて
ないんじやないかな。好きになつちやつたらしそうがない!
個人的にも、とても応援してます。がんばつて!」

「それでは次の便りにいってみましょー」

……姉貴は、前に俺がラジオへお便りを送つてることに気付いていた。

今になつて自分が情けなくて仕方なかつた。

こんな方法で、気付いてもらおうとするなんて。

おそらくだけど、姉貴はこういうところ鈍感だから、今回のお便りに関しては、普通のリスナーからだと思つてゐる。

自分の弟が本当にガチ恋しただなんて、考へない人だ。

「好きになつたら……」

誰にも止められない。

姉貴はそう言つてた。

そんなの、最初からわかつてたはずなのに。

ラジオで、姉貴の反応を見ようだなんて。

「ただいまー」

仕事から帰つてきた姉貴の声が聴こえてくる。

言わなきや、と。

迷いなく、自分の部屋を出た。

結果がどうなろうと関係ない。

自分が納得できなきや、俺は前にも後ろにも進めない。

「『めんね、収録で遅くなつちやつて。晩』『飯すぐ作るね

「あ……あのさ、大事な話があるんだけど……」

「……え、大事な話？ なになに、帰つてきて早々。 んじやあ、一緒に向こうで晩飯の準備しながら話そ？」

「もつお腹ペつペでさー……」

手早く着替えを済ませて、キツチンへと向かう姉貴。

その後ろ姿に向けて、俺は声をかける。

「え……？」

振り返った姉貴は、少し驚いた様子でこちらを見る。

「ああ、今月のラジオ聴いてくれたんだ?」

「……」

どんな顔をして頷いたらいいか、わからなかつた。
だから一生懸命、声を振り絞つて。

「俺、姉貴のことが——」

どうか、あの日見た夢の続きが見られますように。
そう胸に願い、実の姉に真っ直ぐな気持ちを、
この先も変わらないであろう想いを、
大好きなその人の目を見つめながら、
決して視線を逸らさずに。

伝えた——

※END